



煙会所

青年のたまり場「煙会所」という4畳半の囲炉裏を切った小さな施設を、仲間の力を借りて作りました。以来青年たちが足繁く通うようになり、いつしか煙会所は夢を語る場所になっていました。

ある時、囲炉裏の火を囲みながら夕日が話題になりました。その時NHKのディレクターやカメラマンが「双海の夕日は綺麗だ」と言った言葉を思い出しました。夕日を地域資源に何かできないかという話になりました。私の潜在意識の中にあつた(①子どもの頃から見続けていたわが町の夕日、②青年の船で見た世界の夕日、③宇和島水産高校の実習船愛媛丸で見た南太平洋の夕日)3つの夕日の思い出が蘇り、夕日が顕在化したのです。煙会所の板間に学校から貰った色とりどりのチョークで絵を描いたり消したりして生まれたアイデアが「夕焼けコンサート」でした。

しかしいくらいいアイデアがあっても金もなく、音楽のイロハも分からない烏合の衆では何も始まらず、悶々の日々でしたが、とりあえず町長に頼んで金を出してもらおうという話になりました。しかし「しずむ夕日では町が沈んでしまう」と町長の反応は冷やかでした。「町長の反対す

ることは成功する」などと勝手なことを言い、それなら1口1万円の寄付を50口募ろうという話になり、私が半分の25口、青年たち15人が25口を目標にして金を集め、1週間後に集まろうという話になりました。私は3日間で25口を集めましたが、青年たちは25口どころか3万円も集められませんでした。「お金をいただくということは意志の強い説得力と信用が必要である」ことを論じ、青年たちを連れて町内外を歩き回り目標の50万円を集めることができました。

さあ金はできたと意気込んでも、「誰を呼ぶ」「どこでする」でまた行き詰まりましたが、瀬戸内海特産新鮮な鯛をたらふく食べさせるという触れ込みで日フィルのトロンボーン奏者・北原和さんに出演を頼み了解を得ました。場所もかつて山田洋次監督、渥美清主演の映画『フーテンの寅さん・寅次郎と殿様』の舞台となったJR下灘駅のプラットホームを使うことになりました。早速無人の下灘駅を管理している松山駅にこの話を持ち掛けましたが、「事故でもあったら誰が責任を取るのか」とこれまた冷やかでした。それでも「そんなことを言うから国鉄=国+金+失=赤字になる」などと漫才にも似た話で食い下がり、渋々承諾をしてもらいました。

手作りのポスターを作って近隣の駅の構内に貼って回ろうとしていた頃、NHKから朗報が飛び込みました。夕焼けプラットホームコンサートを西日本の旅という僅か15分の番組ながらテレビで取り上げたいというのです。しかしNHKの希望では6月30日に開催してほしいというのです。喜び勇んだものの気がつけば6月30日は梅雨の真っ最中でしたが、運も味方し前日も明るく日も土砂降りの雨でしたが、この日は何故か綺麗な夕日が落ちました。町長さんに来て挨拶してほしいと頼みましたが、「私は反対しているので行かない」と渋る町長さんを「4年後が危ない」と脅し、上灘から列車に乗って下灘駅に町長が降りると町長のあいさつで開演するという粋な計らいをしました。あいさつに立った町長の前には大方